

詩人と思想家

—ひかりと影のロシア像—

奥村 剋三

はじめに

本稿はロシアの国民詩人プーシキンと、彼の同時代人で不思議な生涯をおくった宗教哲学者ピョートル・チャアダーエフの関係を考察しようとするものである。

ソ連邦が崩壊して、ロシアでは政治や経済、文化の全領域で、これまで不動と目されてきたあらゆる権威が揺らぎに揺らいでいる。広場に立つ銅像を引き倒し、通りにつけられた名前をはぎ取って昔の名にもどすといった価値観の転換を象徴する行為はあったが、さてその先に新しい理念、復活した理想として確立したものは何もない。混乱だけがとめどなく進行する。ロシアはどこへ行こうとするのか。ペレストロイカ時代やソ連邦崩壊直後の混乱の中ではまだ、ゴーゴリの『死せる魂』の中の名高い比喻「追いつくことのできないトロイカ」をもちだして、「ロシアよ、おん身はどこへ駆けりゆくのか？」と詠嘆の語調であったマスコミも、あまりの闇の深さにそんな気取った身ぶりをするゆとりを失ってしまった観がある。

筆者にとって最大の関心事は文化的価値の揺らぎである。ソ連時代に高い評価をあたえられていた芸術家、ことに「ことば」の芸術家である作家や詩人は、この先どのように評されるのだろうか。10月革命の直前、ロシア・アバンギャルドの詩人として古い価値を罵倒し、舷側から投げ棄てようとしたマヤコフスキーは、革命後スターリンから「ソ連最大の詩人」のお墨付きをあたえられたが、それだからといってこの詩人をソ連邦同様にクズ箱へ投げ棄ててよいものだろうか。『静かなドン』を書いたショーロホフは、この作品が別人の作からの剽窃だとの批判は絶えないものの、コサックの叙事詩小説としてのこの小説の価値は否定しきれぬものだろうか。あるいはマクシム・ゴーリキーを、ソビエトの御用作家としてロシア史のページから抹消してよいものだろうか。

ロシア古典文学の評価でも、価値基準の動揺がこれから大きくなっていくだろう。本稿を書きだしたとき、筆者はこれまでの慣例に従ってプーシキンを「ロシアの国民詩人」と呼んだ。詩人の偉大さをたたえるこの評語はだいじょうぶだろうか。プーシキンの国民詩人としての評価は19世紀を通じて時とともに高まっていったものであるから、今後も不動であろうと筆者は思う。1880年6月、ロシア文学愛好会の大会で聴衆の圧倒的な感動をよんだドストエフスキーのプーシキンに関する演説も、この詩人のまがうことのない「完全にロシア的な、国民的な才能」を強調していたではないか。

しかし、この詩人も、ソ連文芸学によってあらぬ方向へ持ちあげられ過ぎたきらいがある。ほんとうにプーシキンは「完全にロシア的な、国民的な才能」なのか。詩人の正確な姿をもう一度とらえなおす必要があるだろう。その作業の一つとして、ここでは「西欧派」の思想家のはしりと目されたチャアダーエフとの友情と論争を見てみたい。

1. ツァールスコエ・セロ

1983年冬と1988年秋、筆者はモスクワ滞在中にそれぞれ二度ずつ、ドンスコイ修道院へ足をのばした。古いモスクワの教会建築が見たかったのと、境内の墓地をあるいてみたかったからだ。そこで筆者の知る著名な名前の一つを見た。ピョートル・ヤーコヴレヴィチ・チャアダーエフの墓を見たのだ。この人の名が筆者の記憶にきざみつけられたのは、ロシア語を学んで何年目かに、プーシキンの「チャアダーエフに贈る」と題する、ロシア人なら誰一人知らないものはない抒情詩を暗誦させられたからだ。「恋や希望、静かな栄誉の欺瞞は、ながくはわれらを慰めはしなかった」とはじまる短い詩章だが、若い詩人の自由思想を心地よくつたえている。その最後の5行は次のようになっている。

友よ、信ぜよ、やがて星がさし昇る、
 魅惑にみちた幸せの星が。
 ロシアは眠りから起き上るだろう、
 打ち砕かれた専制政治の破片には
 われらの名前が記されることだろう¹⁾。

対ナポレオン戦争の勝利のあと、青年貴族層の中に燃えあがったリベラリズムは、一面では西欧社会に範をとった市民的自由の獲得、法治政治の確立を目指すとともに、他面、農奴制というロシア社会の汚辱を改めさせるという目標をもっていた。このような空気の中で、1816年夏、当時ツァールスコエ・セロ（現プーシキン市、ペテルブルグ近郊）に宿営していた近衛騎兵聯隊の騎兵小尉であったチャアダーエフと、おなじくツァールスコエ・セロにあった貴族中学校の上級生だったプーシキンの親交が育っていった。筆者はその程度の知識でチャアダーエフを貴族革命家の一人とみなし、やがて1825年、十二月党員（デカブリスト）の反乱へと発展する革命運動の中に位置づけて前記の抒情詩を愛誦したのである。この詩の鑑賞にはそれで差し支えはないのだが、チャアダーエフその人については少し理解が浅かったようである。

ピョートル・ヤーコヴレヴィチ・チャアダーエフ（1794～1856年）は、退役陸軍中佐で地主のヤーコフ・ペトローヴィチ・チャアダーエフと、古い家柄のシチェルバートフ家の出であるナターリヤ・ミハイロヴナとの間に二番目の息子としてモスクワで生まれた。1歳半ほど年長の兄ミハイルともども、最幼時を父の持ち村であるニジェゴロド県フリプノヴォで過した。幼くして両親が相ついでなくなり、孤児となった兄弟は母方の親族であるドミートリー・ミハイロヴィチ・シチェルバートフ公爵の庇護と後見をうけることになる。実際の世話は母の姉にあたるアンナ・

ミハイロヴナがみた。1808年、兄と従兄のイワン・シチュエルバートフと一緒にモスクワ大学に入学した。同窓には後に傑作戯曲「知恵の悲しみ」を書いたグリボエドフ、後にデカプリストとなるヤクーシキンやムラビョフ兄弟がいた。ピョートル・チャアダーエフはこの頃からもう、大の書物マニアとしてモスクワの古書商のあいだで評判の人物だった。若年時から異才をはなつたピョートルは1811年に大学の学業をおえ、チャアダーエフ家の伝統に従い1812年、近衛セミョーノフ連隊の曹長に任官した。1812年6月から1814年3月まで、この連隊の、また後には軽騎兵連隊の士官として対ナポレオン戦争に従軍し、ナポレオン軍の敗走を追って西欧遠征に参加した。

戦後の1816年、チャアダーエフが属した近衛騎兵連隊がツァールスコエ・セロに移駐し、この地に住んでいた有名な歴史家カラムジンの邸で早熟の少年詩人プーシキンと出会うのである。貴族中学校の公開進級試験で、大詩人チェルジャーヴインを前にして自作詩「ツァールスコエ・セロの思い出」を朗読、この老詩人の感涙をさそって一躍ロシア中に文名をうたわれたプーシキンは、かねてから近衛の士官の中に、卓絶した知脳、抜群の博覧強記、しかも美男でダンディの名門貴族がいることを知っていた。ぜひともこの近衛士官と知り合いになりたいと熱望していた。チャアダーエフは詩人の期待どおりの人間的魅力をもっていて、プーシキンの思想形成に大きな影響をあたえた。おそらくこの頃であろう、プーシキンは「チャアダーエフの肖像に寄せて」と題する4行詩を書いている。

天の至高の意志によって

この人は宮廷づとめの桎梏の中へ生まれた。

ローマで生まれておればブルータス、アテネならペリクレス、
残念ながらここではただの騎兵士官。²⁾

チャアダーエフは1817年12月にペテルブルグへ移り、近衛兵団司令官ワシーリチコフの副官となる。1819年には大尉に昇進した。1820年10月、セミョーノフ連隊で兵士の騒擾が起り、事件の顛末を、当時神聖同盟の会議に出席のためトロッパウに滞在中だった皇帝アレクサンドル一世に報告させるために、ワシーリチコフ司令官は副官チャアダーエフを皇帝のもとに急派した。この任務をはたしてペテルブルグへ帰還後、間もない12月に彼は不意に退役を願った。この二つの出来ごとがさまざまうわさや憶測をよんだ。ブロックハウス・エフロンの百科事典の「チャアダーエフ」の項によれば、「1820年にペテルブルグのセミョーノフ連隊で有名な反乱が発生した。このときアレクサンドル帝はトロッパウに滞在中で、ワシーリチコフは不祥事の報告をもたせてチャアダーエフをその地に派遣した。スヴェルベールエフ、ゲルツェン、その他の人びとがそれぞれの回想記で語っているところでは、オーストリア大使のレプツェルテルン伯が自分の使者をトロッパウに送り、チャアダーエフより一足先にそこに着かせることに成功した。そしてペテルブルグの事件の顛末をメッテルニヒに報告した。メッテルニヒはそれを何も知らないアレクサンドル帝に伝えた。チャアダーエフが到着したとき、アレクサンドル帝は彼の遅参をきびしく叱責したが、思い直したように彼に侍従武官の称号をあたえるといった。侮辱をうけたチャアダーエフは一つの慈悲、つまり退役を願って出で、ふつうならある筈の昇任もなしに退役となった。これがチャアダーエフ退役に関して広くつたわっている話である³⁾」。ただ百科事典のこの項の筆者は同

時に、この説を断固否定したロンギノフ（1823～1875年）の説も紹介している。それによるとレプツェルテルンの急使派遣など、まったくなかったとし、アレクサンドル帝はとりあえずの第一報を別のロシア人急使によって知っていたのだという。結局、皇帝とチャアダーエフとの間に何があったか、この任務と直後の退役とは関連があったのか、どうかは、今もって謎のままである。

いずれにせよ、皇帝側近の軍人としての輝かしい未来はなくなった。チャアダーエフのこの転進を、かねてからの外国行きの希望を実現するためとする見方もあるが、実際に彼が英国、フランス、スイス、イタリア、ドイツへの3年間に及ぶ旅にでるのは、1823年の6月である。退役と旅立ちとの間には2～3年のひらきがある。1908年に「チャアダーエフ。生涯と思想」をだして、ロシアでははじめてこの人物の心のひだにまで入りこむ評伝を世におくったミハイル・ゲルシェンゾーン（1869～1925年）は、退役からヨーロッパ行までの空白期間にチャアダーエフの心内でおこった神秘主義思想、宗教への回心に注目している。それがやがて、後にふれる「哲学書簡」の思想につながっていくとの見方である。

一方、詩人プーシキンにも運命の激変があった。自由思想をうたった数々の詩篇や、権臣たちを槍玉にあげたエピグラム、あるいは放蕩無頼の生活は、奉職した外務省の下級職には不相応であった。ことに「自由」と題した頌詩（これは人びとの口から口へ、手から手へ流布されたもので、実際に活字になったのは1856年にゲルツェンがロンドンで発行した「北極星」によってである）には、先帝パーヴェル一世暗殺を描いたくだけりがあった。この暗殺に当時皇太子であったアレクサンドル一世が関与したとの流説があって、先帝暗殺にふれたプーシキンの詩が、皇帝や宮廷の高官たちから胡散くさく思われたことは容易に推察できる。1820年5月4日に詩人は外務大臣ネッセリローデから、南の辺境ノヴォロシアのエカテリノスラフのインゾフ総督の元へ派遣する旨の命をうけた。これは転任という名の追放である。しかし本当はもっと苛烈な処分も考えられていたということだ。皇帝はプーシキンをシベリアか、あるいは白海の孤島のソロヴェツキー修道院へ送るつもりだった。たまたまそのことを知ったのはワシリーチコフ將軍の副官チャアダーエフだった。彼は詩人の身の上を心配して歴史家カラムジンに相談、カラムジンの懇願で詩人の運命は一段ゆるやかな南方配流に決したのだということだ。

南方におもむいた詩人は「異国の空の青」のもとでの日々の仕事や楽しみ、詩神のおとずれのどれをとっても、チャアダーエフとの友情のかわりはしてくれないと、次のようにうたっている。

君は、若き日々の盛りの僕の心を知っていた。
その後、僕が情熱の激浪にもまれて
人知れず苦しむ姿も見た。疲れた受難者よ、
君は、かくされた深淵にあわや落ち込もうとする僕を
滅亡の瀬戸際で用心深い腕にかかえてくれた……

（「チャアダーエフへ」⁴⁾）

これは詩人がチャアダーエフの配慮に感謝の意をつたえようとしたものだろう。同じ詩の中でプーシキンは友との再会の希望を熱烈に表白したが、南方配流（1820年5月～1824年8月）に続く

父の領地ミハイロフスコエ村幽閑(1824年8月~1826年9月)はこの熱望をはばんだ。「自由」思想を共通の基盤とした2人の青春のまじわりは、ここで終わったのである。

2. 哲学と歴史の探求

チャアダーエフの西欧滞在中にあった注目すべき出来ごとの中に、著名なドイツの哲学者シェーリングとの出会いがある。1825年8月、カルルスバード(現在はカルロヴィ・バリ)へきたこの哲学者を、チャアダーエフはアレクサンドル・ツルゲーネフ(当時の進歩派貴族ツルゲーネフ兄弟のうちの長兄)やチュツチェフ(後に詩人として有名になるが、当時は在ミュンヘンの外交官)と一緒に訪問し、懇談している。1820年代、ロシア知識人層のあいだで思想的関心の焦点が、それまで有力であったフランス啓蒙主義からドイツ哲学へ移っていった。20年代中葉、モスクワ大学の教授陣の熱心な教育活動のおかげで、シェーリング哲学が若い学生たちの人気を集めていた。愛智会と呼ばれるシェーリング哲学研究グループさえ生まれ、ここへは後にスラヴ主義者となったイワン・キレーエフスキー、オドエフスキー、コシエリョフ、シェヴィリョフ、ヴェネヴィチノフらが加入した。彼らの詩人氣質に、このドイツ哲学者のロマン主義的傾向、無意識的自然と意識の合一としての芸術哲学という体系が好まれたのだ。シェーリングの講義をきくため、20年代末から30年代にかけ、ミュンヘンへ、後にはベルリンへ、多くのロシア人がたずねている。こうしたロシア文化とシェーリングとの出会いの最も早いものの一つがチャアダーエフの訪問であろう。読書家だったチャアダーエフは、もう学生時代からシェーリングの著書を読んでいたと伝えられている。若いロシア人たちと哲学者との間でどのような話がかわされたかは不明だが、チャアダーエフの思索に深い影響をあたえた出来ごとだった。数年後に彼はシェーリング宛に次のような手紙をかいている。

「1825年、カルルスバードであなたがお会いになったロシア国籍の若い男のことをご記憶か、どうか、わかりません。その男はたびたび哲学上の事柄についてあなたと談論し、あなたはよろこんでご自分の考えをこの男にわかとうと、この男にとっては身にあまる申し出をされました。その折に、自分はいくつかの点で考えを変えたので、自分の哲学を研究するのなら、いま取組んでいる新しい著作の出版を待ったほうがよいとの助言もなさいました。その著作は出版されておりません。その若い男というのは、かくいう私だったのです。待つ間に私はあなたのご著書のすべてを読みとおしました。天才が見事な噴出をみせるなかであなたを持ちあげた高みにまで、あなたの足跡を追って昇りえた、などというのは、私の側からの僭越というものでありましょう。今も思い出しますが、クザン氏はあなたをよく理解していないとお考えでしたね。クザン氏のような大読書人を尻目に、西欧世界で全く無名の私ごときが自分の優越をひけらかすのは余りにも度が過ぎたことでありましょう。しかし私が思いますに、あなたのご著作の研究は私に新世界を開いてくれた、あなたの理知の光のもと、思想の王国でこれまで私には閉ざされていた分野が眼前に開けた、またこの研究は私にとって実り豊かな、心ときめかす思索の源泉となった、このように申すことは私にも許されるでありましょう。またあなたの高邁な指針に従って進みつつも、私には結局、あなたが向かわれたのとは異なる方向へ進む結果になったことも再三であると

いうことも申しあげてよいのではないのでしょうか……。」

このあとチャアダーエフは自分の友人から知ったこととして、シェーリングが最近、ミュンヘンの公開講義でおしえた啓示啓学に言及する。それがどのような内容かはわからないが、これまでシェーリングの著作を読んできた自分としては、シェーリングの体系からはいつか宗教哲学がでてくるとの予感をもってたと伝えていたと伝えている。それで「われわれの時代の最も深い思想家が哲学と宗教との合一の偉大な思想に到達されたことを知ったとき、どれほど幸福であったか、言い表すことばを見出せないくらいです」といっている。「この考えは、私が哲学することをはじめた当初から、光明として、また私の知的活動全体の目的として私の前にあったのです⁵⁾」と、哲学と宗教の合一がチャアダーエフの狙いであることをつけている。

シェーリングの哲学がチャアダーエフの思想にどのような影響を及ぼしたか、これはまだ十分に研究されていない。しかし上記の手紙の内容からも窺えるように、チャアダーエフはかなりな親近感をこの哲学者の思想に寄せている。そしてシェーリングの後期哲学への移行にも敏感に反応していた。それは手に入るかぎり、この哲学者のほとんどの著作を読んでいたことの結果であろう。1823年以降のチャアダーエフの西欧遍歴時代は、一方で彼の哲学上の探求、思索の旅であったことをわれわれは知るのである。

カルルスバードでチャアダーエフがシェーリングと哲学的対話をかわしていた頃、詩人プーシキンは歴史劇「ボリス・ゴドゥノフ」を執筆中であった。

史劇「ボリス・ゴドゥノフ」執筆のきっかけは、カラムジンの「ロシア国史」第10、11巻が1824年に出版されたことである。「シェークスピア、カラムジン、ならびに古い、わが国の年代記の研究が近世史の最も劇的な時代の一つを劇形式に仕立てるという目論見を私にもたらした⁶⁾」とプーシキンは後に（1830年）に書いているが、「最も劇的な時代の一つ」として詩人の興味をさそったのは、1598年、リューリック王朝最後の皇帝フォードルが没した後、帝位を襲ったボリス・ゴドゥノフの治世であった。佞臣から最高権力者に変じたボリスには、ある暗い噂がつきまわっていた。先々帝イワン四世（雷帝）の幼い末子デミートリー皇子がウグリチで殺害された出来ごとの黒幕はボリスだったというのである。カラムジンの歴史はこのあたりを詳細に物語る。帝位についたボリスに、噂は一人の敵対者に化身して迫る。死んだ皇子の名を騙るオトレピェフという逃亡僧がポーランド軍を後楯にロシアに進攻してくる。この戦さの中でボリス帝は病没し、僭称者はボリス一族を殺害してモスクワで即位する。しかしこれで動乱が終息したわけではなく、つぎつぎに野心家や僭称者が出現してはたおれ、1613年にミハイル・ロマノフが新帝に選ばれるまで混乱は続くのである。プーシキンはこのボリス・ゴドゥノフと僭称者の対立、その間に漁夫の利をもとめて策動する大貴族たち、彼らにそそのかされてデモンストレーションに駆り出される民衆を登場させる壮大な歴史劇を構想した。

詩人はなぜこの時代に興味をもったのだろうか。筆者は従来、ソビエトの研究者の先蹤にしたがい、ボリスの時代がロシア農奴制の確立期であることに詩人が着目したのだと考えてきた。デカブリストとして1825年の反乱にたち上った多くの友人同様、プーシキンは若年時から農奴制を敵視し、その廃絶を専制政治打破と結びつけて強く願っていた。この現実政治への関心こそ、史劇執筆のかくれた動機だとしてきた。しかし最近では少し見方を変えつつある。

ロシア革命に先だつ1910年代にペテルブルグにベンゲーロフ教授が主宰するプーシキン研究グループが存在した。その論集「プーシキニスト」第2号に、ボリス・エンゲリガルトという若い学者が「プーシキンの歴史主義」と題する論考をのせている。教授自身、この論文に序文を寄せ、内容への共感を示した。両者が主張するのは、プーシキンが史劇の中で示している世界観、歴史認識は若年時とは大きく変わったという点である。この史劇に濃厚に感じとれる客観主義の基底には、詩人の中に育ってきた「歴史主義」があるとする。ベンゲーロフ教授はこの「歴史主義」を現実をそのまま感得する感覚であると説明する。若い頃は自己に外界(現実)を対立させ、ロマン主義的反抗の対象として現実を描きがちだ。言うならば主観的な世界像となる。しかし物語詩「ジプシーたち」や「ボリス・ゴドゥノフ」執筆の時期(1824年)になると、詩人は運命に反逆するのではなく、和解を目指す。ここでいう運命とは歴史的必然である。それとの和解が意味するところは、歴史の一見不合理な歩みの中に実現されていく崇高な倫理的価値への信頼なのである。エンゲリガルトも「ボリス・ゴドゥノフ」全篇から感得できる叙事詩的静謐に注目する。彼の説くところによると、この史劇で詩人は演劇の改新を目論んだのだが、意図に反して結果したのは叙事詩的悲劇であった。しかしこの悲劇にはギリシア悲劇の「運命」と共通するものがある。プーシキンの悲劇における「運命」は民衆である。民衆の自然発生的行動、予測を越える振舞いに翻弄されるのがボリスたちであり、その様子を見まもる年代記者ピーメンの静寂主義こそ、史劇作者プーシキンが理想視した歴史観照であるとエンゲリガルトは主張する。それはまた、プーシキンが青春特有の反逆精神をおさえて、現実の流れから一歩わきへ退いて物事を客観的に見る世界観をもつに至ったことを物語っている、ともいう。

筆者もプーシキンの史劇に、詩人の歴史を見る目の成熟をみとめる。歴史をうけとめる認識の枠組が、より大きく、より柔軟に、奥行きのあるものになってきたといえよいか。主観の眼鏡で歴史の姿をゆがめることなく、過去の時代のもたらす興味をそのまま、大事に掬いとりとする客観主義が育っているのを感じる。例示のため、年代記の筆を進める老修道僧ピーメンをながめて、後に僭称者となるオトレピエフがもらす述懐を引こう。

秀でた額にも目差しにも、あの方の
高邁な思索を読み解くことはできぬ。
いつも変らぬ敬虔で、壮厳なお顔。
役所で見かける白髪頭の書記が
無辜も罪人も等しく冷静にながめ
善にも悪にも動ずることなく聴入り
憐れみも憎しみも知らぬ様子に同じ。⁸⁾

歴史の終極的倫理性への信頼がプーシキンの内面でしだいに熟成されてきて、ここには、貴族中学校時代のフランス啓蒙主義直伝の自由思想を遠く離れた詩人の精神の在り様がうかがえるのである。この「歴史主義」が詩人に史劇の筆をとらせたのであろう。

3. 「哲学書簡」

チャアダーエフの年譜を見ると、1826年7月17日～18日、外国旅行からロシアへ帰国したチャアダーエフは、国境のプレスト・リトフクスで拘留され、嚴重な持物検査をうける。いわずと知れた、前年12月のデカブリストの乱の余波である。反乱貴族の中には多くの彼の友人がいた。逮捕されたデカブリストの証言で、チャアダーエフ自身も、事件への関与の嫌疑をかけられていた。露国皇帝政府の密偵は帰国途次にある彼を、ワルシャワから監視していた。そしてプレスト・リトフスクの税関で彼は足どめをくうのである。

1ヶ月余の拘留と尋問ののち自由をえたチャアダーエフがモスクワ入りをしたのは1826年9月8日。くしくもこの日、ミハイロフスコエ幽閉を解かれた詩人プーシキンがモスクワに到着した。9月10日、チャアダーエフは詩人との再会をはたしたのみでなく、「ボリス・ゴドゥノフ」の著者自身による朗読の席につらなっている。おそらく2人は、一別以来、各自がとげた人格的思想的変貌をみとめ合ったにちがいない。その後、2人はロシア生活の中で別様の道を歩むことになる。

チャアダーエフの年譜にもどろう。彼は1828年から1830年にかけて、身体的精神的不調もあって、ごく僅かな近親者をのぞいて誰にも会わず、孤独の中で後に「哲学書簡」の名で知られることになる一連の論考の執筆に没頭した。その間にも多くの読書をつづけたことはいうまでもない。

「哲学書簡」は、はじめはエカテリーナ・ドミートリエヴナ・パノヴァという、気まじめで精神的空虚をかこつ若い人妻を訓導する手紙からはじまった。彼女の手紙に答える文章を書きすすめるうちに、西欧旅行以来、彼の中に蓄積され、反芻されてきた世界観、歴史観、宗教観上の思索を全面的に開陳するのに、この書簡形式が最適であることに気づく。こうして個人宛の手紙として書きだされたものが、ロシア社会を震撼させる「哲学書簡」の第一書簡へとふくれ上った。パノヴァの名はどこにもださず、さる夫人宛という形式で、宗教談議からチャアダーエフの筆は進む。これまでの文通でも訴えていたことだが、依然として心の平安がえられないという相手の嘆きに応え、チャアダーエフは相手に一層の宗教的精進を求める。きびしく教会の儀礼を守り、神につかえることをすすめる。さらに日常生活の中でもこのような精神の保持が必要なのだと説く。

この説法はやがて意外な展開をみせる。

「生活の中には、肉体的な在り様ではなく、精神的在り様に係わるある側面があります。それを軽視してはなりません。肉体にとってそうであるように、精神にもある日課が存在するので。これは言い古された真理であることは百も承知です。しかしわが国ではそれが新鮮な価値を失っていないことが、非常にしばしば見うけられると私には思えるのです。わが国の特異な開化の最も顕著な特徴の一つは、他国では、多くの点でわれわれよりも後れている国民の中でさえ、すでに陳腐になって久しい真理を、われわれときたら今なお発見しつつあるという点です。こんなことになるのは、われわれが他の諸国民と手をたざさえて進んでこなかったからです。われわれは人類の偉大な家族のどの一つにも属していません。われわれは西欧にも、東方にも属してい

ません。われわれはあれこれの伝統を持っていません。まるで時間の外にたっているようで、われわれは人類の全世界的訓育から外れているのです。」⁹⁾

その証拠に、真、善のすべてを感得する幸運な素質をもち、魂に甘美な善びを与えるすべてを知ることができる天性に恵まれた貴女のような人が、その美質で何をえられたといえるだろうか。健康な肉体が新鮮な空気なしではありえないと同様に、健全な精神に不可欠な生活の枠組みが、他の国々にはあるのに、ロシアにはないのではないかとチャアダーエフは語りかける。こうして第一書簡はロシア問題に、ロシアの変則性の問題に入っていくのである。

「どの国民にも嵐のような昂奮、激しい不安、無思慮、無目的な行動の時代があるものです。人びとはその時に、肉体的にも精神的にも、世界の中の放浪者となるのです……。すべての社会はこのような時代を経過しました。すべての社会は自己の最も輝かしい思い出、英雄たちの歴史、自己の詩、最も力強く実り多い理想のすべてをこの時代に負っているのです。これこそ、あらゆる社会の必要な基盤であります。……諸国民の歴史の、この魅惑的な段階は、それら諸国民の青春であり、かれらの能力がこの上なく力強く発展する時代なのです。この時代の記憶は諸国民が成熟した時のよろこびであり、教訓であります。ところがわが国にはこうしたものが何一つない。はじめに粗暴な未開時代、ついで荒々しい無知、その後は兇悪で屈辱的な異邦の支配です。この時期の精神は後にわが国の自国権力によって継承されました。これがわが国の青春の悲しい歴史なのです。」¹⁰⁾

異邦の支配とはジンギス汗のまご、バトゥがたてたキプチャク汗国の支配、すなわちタタールのくびきのことである。チャアダーエフは暗い色調でロシアの過去を塗りこめている。ロシア国民はまるで未認知の子のように遺産をもたず、先人とのつながりももたないでこの世に出現したと彼はいう。

「心をときめかす、どんな思い出も、優雅なイメージもわが国の記憶にはありません。その伝承には、どのような力強い教訓もない……。われわれは過去もなく、未来もなく、死のような停滞のただ中に、きわめて狭隘な今日にのみ生きているのです。」¹¹⁾

西の方へ目をむけて、ヨーロッパはどうであろうか。ヨーロッパの諸国民には共通の風貌がある。それほど遠くない昔、ヨーロッパ全体がキリスト教世界を名乗っていた。赤ん坊のときは揺りかごの中で、やや長じては子供の遊戯や母親の愛撫の中で伝えられた共通の文化理念がある。人びとが吸いこむ大気とともに、それは彼らの骨の髄まで貫徹する。ではその理念とは何か。

「それは義務、公正、秩序の理念です」とチャアダーエフは書く。これが西欧の全般的な空気をつくっている。それは歴史以上のものだし、心理以上のもので、ヨーロッパの人びとの生理機構になっている、と彼はいう。このように書くとき、チャアダーエフの脳裏に去来したのは西欧旅行で最初に足をふみ入れたイギリスの首都や、保養生活をおくったブライトンの人びとの暮しだったのか、あるいはババリアの首都の落ち着いた雰囲気や、ローマの偉容だったのか。ところで、このようなヨーロッパの理念にかわる何かを自国の中に見出すことができるだろうか、とチャアダーエフは手紙の相手の女性にたずねるのである。ヨーロッパの地で、原初の荒々しい理性と崇高な宗教思想との相克の中で文明がつくられていった時代に、ロシアでは何があったのだろうか。論はロシアとヨーロッパの差異へと進んでいく。

「運命の意志でわれわれは、自分たちをおしえ導く筈の道徳の教えをもとめて腐敗したビザン

チンにむかいました。それは西側の諸国民の深い軽蔑の対象でした。その直前に一人の名誉欲の強い知脳が全世界的友誼の輪からこの派を奪い去ったのです。そしてわれわれは人間の情欲でゆがめられた形で理想をうけとることになりました。当時ヨーロッパでは合一という生々とした原理があらゆるものを奮い立たせていました。すべてがこの原理から発し、またこの原理に収斂しました。当時の知的活動全体は、ひたすら人智の統一を目指し、どの衝迫をとっても、それは世界理念という、新時代の鼓吹者を見出そうとする強力な要請から発していたのです。¹²⁾

「一人の名誉欲の強い知脳」と名ざされているのはコンスタンチノーブルのフォチウス総主教で、チャアダーエフは彼をキリスト教の東西分裂（1054年）の元兇とみなした。もちろんギリシア正教側は分裂の原因はローマがコンスタンチノーブルに反逆したことにあり、とまったく逆の見方をしている。チャアダーエフは明らかにローマ・カトリック寄りの見方をしている。彼は次のようにもいっている。

「西暦紀元の第一日から、あるいはより正確には救世主が弟子たちに、〈全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい¹³⁾〉といわれた時以降に生じたすべては——キリスト教に対する攻撃をふくめて——、キリスト教の影響という共通理念にのこらず包摂されるのです。キリストの予言が実現していることを確信するためには、意識的にせよ、無意識的にせよ、自発的にせよ、強制されたにせよ、いたるところでキリストの影響が人びとの心に根付いていることを見れば十分です。ですから、今あるような形でのヨーロッパ社会の、すべての無法、罪過、犯罪にもかかわらず、その中ではある意味で神の王国が実際に実現しているのです。なぜならこの社会は無限の発展の原理を内包しており、神の王国が将来、地上で最終的に確立されるために必要なすべてを萌芽の形で、要素としてもっているからです。¹⁴⁾

チャアダーエフがヨーロッパをキリスト教世界の正統とみなしていることは明瞭だ。

ソ連時代には、チャアダーエフのロシア観の反農奴制的側面、現状批判の側面が強調され、彼の宗教思想はほとんど考察されなかった。あるいは19世紀中葉の革命思想家チェルヌイシェフスキーに従って、宗教思想はチャアダーエフの思想の単なる外被にすぎないとの見方をするのがせいぜいであった。しかし国外にいた異論派は、「チャアダーエフの哲学的世界観は明瞭に表出された宗教的特質をおびている。¹⁵⁾」として、チャアダーエフを宗教的哲学者と位置づけている。ロシアでは今後この見方が有力になっていくだろう。

チャアダーエフは「哲学書簡」の第二書簡で、人びとを昔から導いてきた真理は人智の発明したものではなく、さまざまな時代に天から与えられたものだとして理解すべきであるという。

「人間は神の光明に照らされずには、これまで一度たりとも歩みを進めるわけにはいきませんでした。たえず光明が人間の道筋を照らしていたのですが、人間は、光明がそこから発せられ、彼の道の上に注いでいる、光明の源には気づかないのです。福音書の著者はいっています。¹⁶⁾〈すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもともとこの世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。〉¹⁷⁾

「哲学書簡」は第一書簡から第八書簡までの全体が一つの体系をつくるのであるが、第三～第五書簡での存在論、認識論に関わる考察を通しての一般哲学問題をふくめ、全体として神意説的世界認識が顕著である。

「キリスト者にとって人間精神の全運動は、神の、世界に対する不断の働きかけの反映以外の

何ものでもありません。この運動の結果の研究が彼の手の中にのこすものは、彼の信仰の確認のあらたなる結論¹⁸⁾なのです。」

チャアダーエフの「哲学書簡」の主内容は、彼の宗教哲学体系をロシアに適用したときに認められるロシアの変則性についての考察だと概括できるだろう。彼の理解によれば、ロシアの歴史と現実とは、西欧文明諸国民の存在と発展の法則から完全に外れたものであった。ロシアの特徴で彼の目をひくのは否定的なものばかりであった。ロシアの欠陥、迷妄の歴史的根元は何か。チャアダーエフにはそれがビザンチンの東方正教をうけ入れたことだと思えたのである。

4. 「書簡」をめぐる騒ぎ

第一書簡の末尾には「ネクロポリス、1829年12月1日」と記されている。実際には1828年末に書きあげられていたと想定されているが、第八書簡までの全体で一つの体系をなす以上、最後まで書いて、もう一度序文にあたる第一書簡に手を入れ、最終稿としたとも考えられる。チャアダーエフは書きあげた「哲学書簡」の公表をのぞみ、何度も知人(プーシキンもその一人であった)を介して、出版の可能性をさぐったが、不調のまま、いつか1836年になっていた。その年の9月、雑誌「テレスコープ」に第一書簡が掲載され、歴史的事件となるのである。

1831年にモスクワ大学の文学・考古学講座の教授となったナジェージュジンの講義をきいた学生たちの中には、後にロシア文化史に名をつらねるスタンケーヴィチ、オガリョフ、コンスタンチン・アクサーコフ、ゴンチャロフら錚々たる人物がいる。いくなれば彼らの師にあたるこのナジェージュジンが出していたのが「テレスコープ」という啓蒙誌であった。編集長は当然ナジェージュジンだが、彼は雑誌発刊の弁にあたる論説でロシアの世界史的使命の偉大さを強調した。ロシアの組成がヨーロッパと異なるのは文化的歴史的過去をもたないからである。そのことが逆に、現今ヨーロッパを苦しめている革命騒ぎを回避することをロシアに許して、革命の防止の使命がロシアに期待できると彼は論じた。ロシアには見るべき文化的過去がないとする点ではチャアダーエフと一脈通じるが、ナジェージュジンは本来保守的な学者であった。チャアダーエフからもちこまれた原稿をみて、ローマ・カトリック偏愛の言説は気に入らなかったが、長い懇談のあと、ロシア社会には文明開化の原動力としての宗教の力が必要だとするチャアダーエフの魅力ある話ぶりに圧倒され、この編集長は「哲学書簡」全編を自分の雑誌に掲載することにした。当時、この雑誌は他誌に読者を奪われつつあり、モスクワの上流階級のサロンで智者の評判の高いチャアダーエフの論考をのせることで、「テレスコープ」誌の劣勢を挽回しようとしたのだともいわれている。

問題は検閲をどう突破するかである。幸い「テレスコープ」誌担当の検閲官はモスクワ大学学長ボルドゥイレフで、ナジェージュジン教授と同じ官舎に住んでいた。すでに老境に入った学長は仕事は午前中にすませ、夜はもっぱらトランプによる小額の賭け事をたのしむ日々だった。そのトランプの時間に「テレスコープ」誌第15号の原稿がもち込まれた。学長はナジェージュジンが自分に迷惑をかけるなどとは露ほども思っていなかったので、自らは目を通すことなく、説明をきいただけで無雑作に許可をあたえた。後に審問の場にたたされたとき、学長は大学の公務多

忙で、つい不注意を犯したと釈明した。

「テレスコープ」誌第15号は9月末にでた。掲載の無署名論文は、すでに何年もの間、口頭で、あるいはフランス語による原本のコピーで存在を広く知られていたから、著者がチャアダーエフであることはすぐにわかった。官憲の反応よりも早く、ロシア社会全体がこの論考をめぐって沸騰した。ごうごうたる非難の合唱である。ロシアは侮辱されたと、人びとはいきりたった。モスクワ大学の学生たちの抗議集会では、何を血まよったか、一人の学生が侮辱されたロシアのため、銃をとってたちあがれと叫んだという。チャアダーエフの甥で、彼の伝記を書いたジハリョフは反響のすごさを次のように書いている。

「ロシアで読み書きが始まり、出版事業が始まってこのかた、後にも先にも、文学的あるいは学術的出来ごとで、これほど大きな影響を及ぼし、これほど広はんなる作用を及ぼしたものはない。こんなに急速に、しかもこれほどの騒動をともな¹⁹⁾って広がったものはなかった。」

この少し後でおこるプーシキンの決闘と非業の死もこんなさわざにはならなかったという。人びとはやがて「哲学書簡」のどこにも見あたらない「ロシアの過去は空っぽで、現在は我慢がならず、ロシアに未来はない。ロシア、それは理性の空白ページ²⁰⁾であり、疎外と奴隷制のもたらした惨害がどれほどのものかを諸国民に教える不気味な教訓である」という文言を、チャアダーエフその人からの引用であると本気で信じ、激高した。チャアダーエフはロシアを侮辱した、それを放置しておいてよいのか、とする世論に押されるかたちで官憲側の動きがはじまった。

1836年11月30日付で、最終的に確定した処置を告げるニコライ一世の勅令がだされた。そこには次のように記されていた。

「チャアダーエフを精神病者と見なしつづけること、ならびに、精神病者として医学的警察的監視下におくこと。ナジェージュジンをウースチ・ススイリスクへ追放し、警察の監視下におくこと。ボルドゥイレフを勤務怠慢のかどで退職させること。」

プーシキンは、雑誌が刷りあがるとすぐに、著者から寄贈された。プーシキンはすでに1831年にフランス語の原稿で「哲学書簡」を読んでいた。詩人は1831年7月6日付でツァールスコエ・セロからモスクワのチャアダーエフ宛におくったフランス語の手紙で「哲学書簡」の内容にふれている。そこからうかがえるのは、プーシキンが読んだのは第六書簡と第七書簡で、チャアダーエフが「人間理性の今日の傾向は、明らかにあらゆる知識に歴史の衣裳を着せようとしていま²¹⁾」と歴史を考察した部分である。チャアダーエフは前述のようにキリスト教の教理の地上での展開を至上の目的とする立場をとっている。この立場から、従来の歴史書がキリスト教以前の異教時代の哲学者をたたえ、聖書の人物たちをないがしろにしていることに不満をのべる。なぜソクラテスの偉大さにふれて、モーゼの偉大にふれないのか。マルクス・アウレリウスの叡知をたたえるのに、ダビデを無視するのか。ダビデこそ「最も神聖な英雄主義の完璧な模範²²⁾」であり、それにくらべてマルクス・アウレリウスは「人工の偉大、華美で高慢な徳行の好奇な例」にすぎないといっている。ホメロスの偉大な名前にはある種の不名誉が結びついているともいう。あるいはローマの法王制に同情的で、そこにキリスト教世界の再統合の象徴を見ている反面、宗教改革には否定的である。第六、第七書簡のこのような内容に関して、手紙の中でプーシキンは次のように述べている。

「貴兄の歴史理解は小生にはまったく新奇なものでして、全面的に賛同というわけにはまいりません。たとえば貴兄のマルクス・アウレリウスへの嫌悪とダビデへの偏愛は小生には理解しかねます……。ホメロス作品に見られる多神教の明るく素朴な描写が、なぜそんなにも貴兄を憤慨させるのか、小生は理解にくるしむのです。その歴史的価値のほかに、これは貴兄自身認めておられるように歴史のモニュメントなのです。イリアードの中に血腥い情景があるとしても、同様のことは聖書の中にだって見かけられはしないでしょうか。貴兄はカトリックに、つまりローマ法王にキリスト教の統一を見ておられます。しかしわれわれがプロテスタントの教義の中に読み取るキリストの理念にも、その統一がふくまれてはいませんか。この理念ははじめは君主制的でありましたが、後に共和制的になったのです……。」²³⁾

このような交流はあったのだが、詩人はやがて美貌の若い妻をめぐって、そのことで人生の新しい葛藤にまきこまれていき、宗教哲学者との対話はふたたび跡絶えてしまっていた。

5. 2人の歴史観のちがひ

1836年9月、「テレスコープ」誌にのったチャアダーエフの第一書簡がロシア社会を震撼させたとき、プーシキンもまた一読して驚愕した。フランス語で読んでいたときとはちがった迫力と暗たんとした文調が詩人を驚かせたのである。読後の印象をもとに、10月19日付でチャアダーエフ宛に書かれた詩人の手紙は、チャアダーエフのロシア観を論駁するかたちで詩人のロシア観を明らかにしている。少し長文ではあるが、以下に訳出してみよう。

「パンフレットを御恵送いただき、ありがとうございます。これが翻訳され、活字になったことに大いに驚きはしましたが、満足をもって読みかえました。訳文は意に合ったものです。原文のエネルギーと伸びやかさがそのまま残されています。お考えについては、あなたも御承知のように、私は貴説に全面的に同意するとはいいかねます。キリスト教の東西への分裂は、うたがひもなく、われわれを残余のヨーロッパと切り離し、ヨーロッパを震撼させた大事件のどの一つにもわれわれは参加しませんでした。しかし、われわれにも独自の使命があったのです。モンゴルの侵攻を呑み込んだのは、それはロシアだった、ロシアの果知れぬ空間だったのです。タタール人はわが国の西の国境を越えて進む勇気をもちませんでした。そうすれば背後にわれわれが残ることを怖れたのです。彼らは荒野へもどっていき、キリスト教文明は救われました。この目的達成のため、われわれは完全に独自の在り様をとおさねばなりませんでした。ひき続き、われわれはキリスト教徒のままでしたが、この独自の在り様がわれわれをキリスト教世界のはずれ者にしてしまったのです。こうしてわれわれの受難のお蔭でカトリック・ヨーロッパのエネルギーな発展は、あらゆる干渉を免れえたのです。あなたはわれわれがキリスト教をくみとった源泉が汚濁していた、ビザンチンは軽蔑に値した、今も軽蔑されている、等々と申しておられます。ああ、友よ、イエス・キリスト自身はユダヤ人として生まれたのではなかったのでしょうか、エルサレムは根も葉もない絵空事ではなかった筈でしょう？ 福音書はそのために感銘が薄くなっているのでしょうか。ギリシア人からわれわれが受け取ったのは福音と伝説であって、子供じみた些事やいさかひの精神ではなかった。ビザンチンの慣習は、決してキーエフの慣習にはなりませ

んでした。わが国の聖職者たちは、フェオファンの出現までは、尊敬に値するものでした。彼らは一度も自らを法王主義の低劣さで汚すことはありませんでした。人類が統一を何よりも必要としていた時に、教会改革を呼びかけたりはしませんでした。今日のわが国の聖職者が時代遅れだという点は賛成です。原因をお知りになりたいですか。彼らが長いひげをたくわえているためです、ただそれだけです。彼らは趣味のよい社会には属していません。わが国の歴史は意味をもっていないという貴説には、私は絶対に同意できません。オレグやスヴァトスラフの戦さ、封地をめぐる内紛——これはあなたが仰言る、あらゆる国民の青春を特徴づけている、炎のような、無目的の活動、沸きたつ発酵に満ちみちた生活ではないでしょうか。タタールの侵攻は悲痛な、偉大な見世物です。ロシアの覚醒、その力の展開、統一（もちろんロシアの統一）への運動、2人のイワン、ウグリチで始まり、イパーチエフ修道院で終わった壮大なドラマ——どうです、これらすべては歴史ではないでしょうか、単なる色あせた夢なのではないでしょうか。ピョートル大帝はどうでしょう、たった一人で全世界史なのですよ！ エカテリーナ二世は？ 彼女はロシアをヨーロッパと同格におきました。そしてあなた御自身をパリに導いたアレクサンドル帝は？ また（率直に申して）あなたは現下のロシアの状況に何ら顕著なものを、後世の史家を驚かせるに足るものをお認めにならないのですか。後世の歴史家がわれわれをヨーロッパの外におくとお考えですか。私個人としては陛下に愛着を感じていますが、自分のまわりに見るものすべてに対しては、到底感激するわけにはまいりません。文学者として私はいつも苛立しい思いをさせられ、偏見を免かれぬ一個の人間である私は侮辱されております。しかし誓って申しあげますが、私はこの世界の何物ともわが祖国を引きかえたりはしません。また神がわれわれにお与えになった、わが祖先たちの歴史以外の、どんな歴史ももちたくはありません。²⁴⁾（後略）

これはもう堂々たるロシア論である。しかも詩人の「歴史主義」は「ボリス・ゴドゥノフ」執筆時のそれをさらに深化させたものになっている。「ボリス・ゴドゥノフ」では、年代記作者ピーメンの善悪を超えた叙事詩的静謐と同化した詩人だったが、今やその透徹した眼光は過去、現在、未来へ流れるロシア史のダイナミズムを見すえてはなさない。チャアダーエフの歴史観の抽象性、形而上性に対し、プーシキンの歴史観は具体性、力動性が目立つ。プーシキンはロシア史と自分との有機的なつながりを感じ、歴史のたしかな手ざわりを感じているのである。

思想家と詩人の切りむすびは、前者が精神病者として沈黙を強いられ、後者が決闘に倒れたことで、これ以上の展開はなかった。しかし光と影ともいうべき2人のロシア観、歴史観のちがいはすでに十分すぎるほど明らかである。

ここで冒頭の問題にもどって国民詩人プーシキンについて考えよう。詩人はチャアダーエフの「哲学書簡」に触発され、ロシア史の意義について考えるうち、自分の存在、自分の創作のすべてがロシア史と血肉のつながりをもつことを自覚した。そのことは上記の引用の終りの方の、「誓って申しあげますが、私はこの世界の何物ともわが祖国を引きかえたりはしません。また神がわれわれにお与えになった、わが祖先たちの歴史以外の、どんな歴史ももちたくはありません」という、ほとんどパセチックな表白でも明らかだ。これほどまで自分の内部にロシアを、その歴史とのつながりを感じている詩人がロシア的でない筈がない。プーシキンはまちがいがなく「完全にロシア的な、国民的な才能」なのである。チャアダーエフの「哲学書簡」はそのことを、

詩人にあらためて自覚させたといえるだろう。

註

この稿を書くにあたって、チャアダーエフの生涯については、「偉人文庫・伝記シリーズ」のボリス・タラーソフ著「チャアダーエフ」増補第二版、1990年を参照した。そのほかミハイル・ゲルシェンゾーン「チャアダーエフ・生涯と思索」(「グリボエードフのモスクワ」モスクワ、1989年の中に所収)、ブロックハウス・エフロン百科事典(露語版)など。

- 1) プーシキン10巻全集, 第4版, 第1巻, 1991年, レニングラード, 307頁。
- 2) 同上, 371頁。
- 3) ブロックハウス・エフロン百科事典(露語版)第75巻, (リプリント版, 原本は1903年刊), 352頁。
- 4) 前掲, プーシキン全集, 第2巻, 48頁。
- 5) チャアダーエフ「全著作ならびに書簡選」(全2冊), モスクワ「ナウカ」出版所, 1991年, 75~78頁。
- 6) 前掲, プーシキン全集, 第7巻, 112頁。
- 7) 「プーシキニスト」(第1巻~第3巻, 1914~18年), ベンゲーロフ編。
- 8) 前掲, プーシキン全集, 第5巻, 200頁。
- 9) 前掲, チャアダーエフ, 第1巻, 323頁。
- 10) 同上, 324頁。
- 11) 同上, 325頁。
- 12) 同上, 331頁。
- 13) マルコの福音書, 第16章15。
- 14) 前掲, チャアダーエフ, 第1巻, 336頁。
- 15) ロースキー「ロシア哲学史」(露語版), モスクワ, 1991年, 52頁。
- 16) ヨハネの福音書, 第1章, 9~10頁。
- 17) 前掲, チャアダーエフ, 第1巻, 352頁。
- 18) 同上, 353頁。
- 19) タラーソフ「チャアダーエフ」, モスクワ, 1990年, 306頁。
- 20) 前掲, ブロックハウス・エフロン百科事典, 第75巻, 354頁。
- 21) 前掲, チャアダーエフ, 第1巻, 392頁。
- 22) 同上, 396頁。
- 23) 前掲, プーシキン全集, 第10巻, レニングラード, 1979年, 659頁。フランス語の原文は282頁。
- 24) 同上, 688~689頁。フランス語は464~465頁。